

編集委員

インタビュー

産業遺産 憩いの場に再生

「兵庫運河を美しくする会」会長

山下 邦人さん(64)に聞く

兵庫運河の活性化に取り組み原動力は?

物流の要所として日本の近代化を支えた兵庫運河。完成から100年超。一時は深刻な水質汚染に悩まされたが、現在は魚類や貝類がすみ、市民の憩いの場となった。「兵庫運河を美しくする会」(事務局・神戸市兵庫区)は長年、運河の水質改善や周辺の美化に努めてきた。地域の財産としての運河を守り、次代に引き継いでいくか、会長の山下邦人さん(64)に聞いた。

(吉村勇人)

「兵庫運河の成り立ち」

「海上交通の難所だった和州岬を避けるためのバイパスとして、明治32(1899)年に完成した。新川、新湊川など5つの運河の総称で、全長約6・5キロ。水面積は日本最大級。荷物の運搬なども須磨、長田方面と神戸港を結ぶ動脈として、1日に数百隻の船が行き来していた」と聞いている。

「周辺に工場が立ち並び、貯木場としても使われたが、高度成長期には水質汚染が進んだ。以前は運河で水遊びを楽しんでいた人もいたらしいが、ヘドロがたまり、メタンガスが発生し、悪臭がひどくなった」

「そこで『美しくする会』が結成された。『周辺企業の社が、水質向上や周辺美化を目的とし、昭和46(1971)年に設立した。現在は45の企業と個人が加盟し、清掃活動やホームベジ(日P)での情報発信を行っている』

「周辺企業の努力もあり改善した。個人的な感覚としては、10年くらいだと思うが、特に透明度が上がった。ボラやチヌ、カニ類

「やました・くんに」1960年生まれ、高松卒業後「水島製薬商会」入社、2014年から同社取締役会長。00年から「美しくする会」の活動に参加。13年に同会会長就任。大阪市在住。



神戸市兵庫区中之島(撮影・風斗雅博)

「海の生き物が戻ってきている。また、専門家が調査したところ、レッドリストに掲載されていたツボミガイやリシケタイラギなど、絶滅の恐れがある貴重な貝類も生息していることが分かった」

「兵庫漁業協同組合など、共同で『兵庫運河の自然を再生するプロジェクト』を立ち上げた。地元住民らと一緒に運河の生き物を調べ、確認された貝類などを紹介する図鑑を発行した。漁協を中心にプロジェクトのメンバーが、小学生とアサリの観察やヒラメの稚魚の放流などを実施し、環境教育の

「活動を通して、まず会員の意識が変わった。それまでは運河を『昔からそこにある風景』としてしか認識していなかったのが、守るべきものだと気づくようになった。会員以外の近隣住民の方も自

「年2回、会員企業のメンバーが運河沿いの遊歩道などのごみを拾う。また漁協が船を出し、水面と水中の清掃もしている。残念ながら意図的に投棄されたものも、まだまだあるのが現状だ」

「活動を通して、まず会員の意識が変わった。それまでは運河を『昔からそこにある風景』としてしか認識していなかったのが、守るべきものだと気づくようになった。会員以外の近隣住民の方も自

地域の財産 次代に継承

「水質が改善したことで、憩いの場として定着した」

「遊歩道などでジョギングやウォーキングを楽しむ人もいる。また、水上スポーツの『パドルボード』を楽しむイベントも行われている。実際に運河で楽しむことで、その良さに気付いてもらいたい」

「兵庫運河の魅力は、日本の産業化を支えた『産業遺産』としての歴史的価値と、大都市の真ん中にある貴重な自然空間が息づくこと。水エリアという多面性がある。一時水質が汚染されたが、市民の努力で克服した。人工のスポットだが、自然の素晴らしさを身近に感じられる。来年には近隣に大型商業施設が完成するが、より多くの市民に訪れてもらえる機会になるのではないかと」

「『地域の財産』を、地域でどう守り、育っていく。『最近、兵庫運河をテーマに研究を進める学生と知り合った。運河周辺を活性化させようとする熱意に心強い思いがした。数十年前単位で地域の将来を考えたときには、若い世代のアイデアも参考にしたい』

「次世代につなきたい。生き物との触れ合いなどで、子どもたちに関心を持ってほしい。行政や他団体との連携を重視し、活動を継続していくことが大事だ」

読者のひとこと

「憩いの場には歴史と、人々の努力や思いが込められていた。いくつもの団体が運河に関わりが積み重なっているという。『人と人のつながりは大切ですね』との言葉にうなずいた。」

雑草に学ぶ農ライフ

あ・ん

編集委員 松本茂祥

「森のようだとこつぶやいていた。近くの貸農園で2畝の畑を借りた。5〜7月の第一四半期の最大の収穫は雑草だった。放置していたら『森』になった。周囲の農家を見渡すと、きれいに草が抜き取られている。ほうぼうと生えた畑は、身なりを構わない人のようにだらしないく見えるという。そう聞いて思わず無精ひげの生えた顔をなでた。週末、鎌で刈り決めた。五輪置った中のリオデジャネイロもかかとと思う曇りの中、森に分け入る。草の影はしつとりついていて幾分涼しい。木漏れ日のように光が差し込み、若い芽や地をはう草もある。名前も知らない草が共存している。せめて花でも実でもつければ、こんなさぞいぬ抜いはされないものと思う。けれど、雑草の猛者どもはあえて険しい道を選んだ。適材適所というけれど、生きる場所とは与えられるのではない、自ら選ぶもの、とその姿は静かに説く。一なんてこじつけでも唱えなければ作業が続かない。雑草を生かす方法を考えてみる。枝豆の根元切りから生えた草が、頭ひとつ分ほど高いところまで伸びている。競争させれば、野菜の成長が早まるのではないかと、それなら草を刈らなくてもよいのではないかと、頭の中が堂々巡り始める。振り返ると、畝の半分にも届いていない。あともう少し、雑草と闘おう。いや違う。自分、孤獨と。にしてもこの恍惚感は何だ。熱中症予防、じんじんする頭でコンパニに駆け込む。アイスクリームで気を取り直す農ライフ。かげろうの向こう、実りの秋はまだ遠い。」

「森のようだとこつぶやいていた。近くの貸農園で2畝の畑を借りた。5〜7月の第一四半期の最大の収穫は雑草だった。放置していたら『森』になった。周囲の農家を見渡すと、きれいに草が抜き取られている。ほうぼうと生えた畑は、身なりを構わない人のようにだらしないく見えるという。そう聞いて思わず無精ひげの生えた顔をなでた。週末、鎌で刈り決めた。五輪置った中のリオデジャネイロもかかとと思う曇りの中、森に分け入る。草の影はしつとりついていて幾分涼しい。木漏れ日のように光が差し込み、若い芽や地をはう草もある。名前も知らない草が共存している。せめて花でも実でもつければ、こんなさぞいぬ抜いはされないものと思う。けれど、雑草の猛者どもはあえて険しい道を選んだ。適材適所というけれど、生きる場所とは与えられるのではない、自ら選ぶもの、とその姿は静かに説く。一なんてこじつけでも唱えなければ作業が続かない。雑草を生かす方法を考えてみる。枝豆の根元切りから生えた草が、頭ひとつ分ほど高いところまで伸びている。競争させれば、野菜の成長が早まるのではないかと、それなら草を刈らなくてもよいのではないかと、頭の中が堂々巡り始める。振り返ると、畝の半分にも届いていない。あともう少し、雑草と闘おう。いや違う。自分、孤獨と。にしてもこの恍惚感は何だ。熱中症予防、じんじんする頭でコンパニに駆け込む。アイスクリームで気を取り直す農ライフ。かげろうの向こう、実りの秋はまだ遠い。」

特別展

主催 赤穂市立百年考古館・神戸新聞社 後援 サンテレビジョン・ラジオ関西・NHK神戸放送局

道水たれた掘券

立妖図